〈研究論文9〉

牧口価値論とカント価値論の比較研究

渋谷仙吉

一　はじめに

価値の問題は、善や道徳として古代ギリシャ以来哲学の中心的テーマの一つとされていたが、「価値」という言葉が哲学上の用語として用いられるようになったのは意外に新しく、一九世紀になってからのようである。このことは、価値の哲学を（合理的に）解決することがいかに難しいものであるかを意味している。価値の本質を解明し、系統的にまとめあげた説を価値哲学または価値論という。価値論が教育学や経済学の部門からも研究されていたが、価値の本質について、価値とは何か、価値と事実との関係等の問題について本格的な研究が行われたのは一九世紀末からである。

近代西欧の哲学の主流をなすのは、R・デカルト（一五九六～一六五〇）以来の合理論思想であったが、このような合理主義の潮流に対する反抗として、一九世紀末から二〇世紀にかけて、人間的生の非合理な働きを根源的なものとみる「生の哲学」が始まっている。「学」の哲学から「生」の哲学への方向を開いたのはA・ショーペンハウア（一七七八～一八六〇）であったが、さらにはっきりと生の原理を打ち出したのはF・W・ニーチェ（一八四四～一九〇〇）であり、生きる意味と価値を哲学の中に提起している。次いで、カント派に属し、ドイツ西南学派を創始したW・ビンデルバント（一八四八～一九一五）とそれを受け継いだH・リッケルト（一八六三～一九三六）などの「関係性」への着目がその先駆といえよう。I・カント（一八四八～一九一五）をはじめとするドイツ観念哲学において、価値内容として、真・善・美または聖（ビンデルバンド）であるという価値論が広まった。

アメリカにおいては、J・デューイ（一八五九～一九五二）が出て、ヨーロッパの「生の哲学」に呼応して、「生きる」ことを主眼とした行動的思想に立ち、従来の真・善・美の価値体系にメスを入れ、特に「真」に対して新たな取り扱い方をした。すなわち、「真」は善・美と並列する価値内容ではなく、善や美を実現するための「手段価値」であると唱えた。

日本では、ドイツ哲学が早くから哲学界の主流を占め、価値内容を真・善・美とする価値体系が流行することになった。これに対して、中村元は新カント派の価値哲学に頑強に抵抗し、独創的な価値体系を樹立した牧口常三郎（一八七一～一九四四）を紹介している（文献1）。彼は一九三一年その著「価値論」（文献2）において、価値は対象と評価主体との関係によって発生するとの立場から価値内容から「真」をはずし、代わりに人のためになる「利」を根底的な価値として加え「美・利・善」を価値内容とする価値体系を提案し、五官が評価主体の美の価値よりも個人が評価主体の利の価値がより大事であり、利の価値よりも社会が評価主体の善の価値が最も大事とする価値判断の基準も明示している。

本論文ではまず、両価値論の価値内容を比較し、カントは「真理」を価値内容としているが、利害を価値から除外していること、牧口は真理を除外し「利害」を価値内容に入れていることに注目する。

次に、両論の価値内容が異なるのは、両者の客観的視座と主観的視座の違い、または理性的人間像、欲望的人間像などの人間像や人間の境涯の相違に起因することを論述する。

最後に、両論の真理観、価値観の相違は根本的に視覚認識による二値論理を前提としていることに起因していることを論述し、触覚認識に基づいて行為という別次元の論理（仏法の空仮中の三諦）、仏法の人間像（十界の境涯論）の側面に基づいて両価値論を位置付けることを試みる。

二　カント学派の価値論と プラグマティズム

カントの哲学は、すべての認識が人間理性の本質的目的に対して持つ関係についての学問であり、人間一般の立場に立つ人間的哲学であるといわれる。カント哲学の対象は究極的には人間であるといっても過言ではないだろう。人間は理論理性と同時に実践理性の所有者でもあるという人間の二元的性格をもつとして展開されている（文献3）。

カントは価値を存在で定義しつくそうとする自然主義的な傾向を押し止め、価値と存在を分離しようと企てた。西洋哲学の伝統的存在論で、我と独存する「物自体（the thing in itself）」と「我にとっての物（the thing for me）」とを区別する存在論に転換したのもこの企ての重要な布石と見なされる。ロックが経験主義的な哲学で事実問題のみを扱ったのを不満として、カントの

哲学ではむしろ権利問題を扱うのだと宣言している。カントのこうした区別をよりはっきりした形で述べたのがR・H・ロッツェ（一八一七～一八八一）である。彼は「価値は存在するのではなく妥当するのである」と当為と存在を厳しく区別した。彼の弟子であるW・ヴィンデルバントも単なる判断と価値判断を区別し新カント学派の価値哲学の出発点とした。

ヴィンデルバントは、真・善・美の価値体系にそれぞれ「純粋理性批判」（第一版一七八一）、「実践理性批判」（一七八八）、そして「判断力批判」（一七九〇）が対応し、論理学、倫理学、美学の三基本学が規範科学として定立されていると記している（文献4）。

生の哲学とプラグマティズム：合理的科学思想の支配的傾向になんの疑問もいだかなかった一九世紀、生の躍動を根源的なものとするニーチェは、事物それ自体に価値はなく、我々が事物を解釈することが価値であり、価値評価は事物にたいする遠近法のようなもので我々が価値定立者であるとしている（文献5）。ロゴスの働きよりも生の躍動を根源的なものとみる「生の哲学」によって打ち出された後、フランスではベルクソンの哲学に、ドイツではディルタイ、ジンメル等、生の哲学者を輩出した。

プラグマティズムは、「生の哲学」の影響を受けていると考えられるが、ヨーロッパ大陸の哲学からのアメリカ哲学の独立を意味するだろう。ギリシャ語のプラグマ（行動）に由来し、「行動」を思惟に優先させ、観念や真理は行動の帰結であり成果であるとする経験論的立場をとっている。C・S・パース（一八三九～一九一四）にはじまり、これを継承したW・ジェームズが一九〇七年に「プラグマティズム」を刊行してから広く世に普及した。さらに、J・デューイは、思考は行動するための道具であるという道具主義を発展させた。彼の制度等より人間変革を第一とする思想は、教育学に応用されるなど、牧口にも影響をあたえている。

プラグマティズムは、ドイツ観念哲学に対して、実生活上の体験を上位において、経験主義、相対主義の立場をとるとともに、イギリス経験論に対して人間の主体性を導入する。生活のなかで有益であると確認されたものが真なる概念であるとし、観念の内容や体系ではなく、観念に到達する過程の方法論を重視し、概念形成の過程に価値判断を導入し、真理と価値、真理認識と価値判断とのあいだに区別を認めない独特の論理を生み出した。ただし、プラグマティズムは一つの体系化された思想ではなく、パース、ジェームズ、デューイのあいだにもかなりの差異がある。

三　牧口価値論

牧口常三郎（一八七一～一九四四）は半生を教育界に捧げ、その間、自然物ならびに自然現象と人間の社会生活の相互関係を研究し、それらの間に原因結果の法則を求めた「人生地理学」（文献6）を一九〇三年に出版している。その後も牧口は、激職の傍ら、

寸暇を惜しんで教育現象を科学的に考察し、教育目的として価値観を考察し、真・善・美の価値論を批判し、真理と価値を峻別して「創価教育学体系」（文献7）を出版している。その第二巻が創価教育学体系の中核的哲学として一九三〇年に出版されている。その中で、人生地理学の対象も価値であり、創価教育学も難解な価値問題に没頭しなければならない因縁は牧口の学問対象が常に実生活を離れないからであろうと述懐している。牧口の学問に対する姿勢は、「第一に生活から学問へ、次に学問から生活へ」即ち、概念の遊戯を捨て経験的立場から実生活に即して思索し、真実の姿を把握することであった。

牧口価値論の要点：牧口価値論に関する研究著書は、すでに宮田著「牧口常三郎はカントを超えたか」（文献8）、村尾著「牧口常三郎の『価値論』を読む」（文献9）等ありますので、本稿では牧口価値論の特徴とその必要な要点をまとめる。牧口はまず、真理は認識主体によって対象が認識されたものであり、価値は評価主体によって対象が評価されたものであるとして、行為主体の境涯を明確にして価値内容、価値の種類を分類し、統一的に説明したところに牧口価値論の独創性が光っている。

従来、「もの」自体に価値があるとして、「もの」が価値を決定するとの唯物的な価値説、主体の「心」がもとで、主体が価値を決定するとの唯心的な価値説の二通りがあったが、どちらも正しくないとして斥けている。価値は欲望を充足するもので、評価主体と対象との間に生ずる、吸引、反発の情的関係性・関係力のことであるから最高の満足感から最低の不快感に至るまでの無数の段階があるとしている。同一評価主体が種々の対象に望む時だけでなく、同一対象でも時、環境そして評価主体の境涯の変化で価値の相違が生ずる。

牧口は評価主体の違いを明記して価値の内容を分類している。すなわち、評価主体が五官で感情的評価するときの価値内容が「美醜」であり、個人が評価主体で評価する価値内容が「利害」であり、社会が評価主体で評価する価値内容が「善悪」であると分類している。さらに、好き嫌いにとらわれて利害を忘れるのは愚かであると美の価値よりも利の価値が大事であるとし、損得にとらわれて善悪を無視するのは悪であるとして利の価値よりも善の価値がより大事であるという価値判定の基準をも設定していることに注目すべきだろう。この価値判定の基準を生活指導原理として幸福な人間を育成する創価教育の根本として応用している。すなわち、人生の目的は幸福の追求であり、価値は幸福の内容となり要素であるとしている。価値にも大・善、中・利、小・美の価値とランクがあり、美・利の個人的価値より社会を評価主体とする善の価値を積む大善生活こそ人生最大の目的で、至幸至福への道であるとして、独創的な価値論に基づいた幸福論をも展開している。

四　両価値論の比較と考察

両価値論の相違点：古来、人間は客観的、主観的、または心理や境涯の側面等からさまざまに定義されてきた。仏教は、生命自体が内より感じている境地、生命感に注目し、それを客観的に状態とか、境涯とか、変化相などとして一〇のグループに分類している。これを仏教では「十界論」として説いている。具体的には、地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人界、天界、声聞界、縁覚界、菩薩界、そして仏界の十種類である。このような十種の境涯はそれぞれ縁によって生じ、心身を支配しているのが我々の生命の実体であるとしている。十界のうちの地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天をまとめて六道とし迷いの凡夫・衆生が輪廻する動物的人間とみなされ、四聖（声聞・縁覚・菩薩・仏）と区別される。空理をつきつめて煩悩を断ち切ろうと努め修行する声聞と一分の理を縁によって悟った者とされる縁覚をまとめて二乗ともよび、理性的人間に対応するだろう。

歪んだ鏡には、すべてが歪んで映るように、人間は同じ現象であっても、どのような境涯でそれを見るかによって全く異なって見える。カント学派は理性的人間、真理探究者として価値を評価し、研究しているので、仏教からすれば二乗の境涯で評価しているとみなされる。したがって、カント学派は「真理」、「論理の正しさ」は大事な価値内容であると評価したと推論される。一方、牧口は生活者の立場すなわち仏教での六道の境涯で価値判断をすると、不変の真理は生きるための欲望を満たすために価値と評価されず、経済活動などの「利・害」が大事な価値内容となると評価したと推論される。このように、両価値論の違いは評価主体がどのような境涯で価値を評価したかに依存すると推論される。

両価値論の論理的類似点：カント学派と牧口は評価主体の境涯の違いによる価値評価に依存するが、論理的に「価値」を二値論理に基づいて価値判断をしていることは基本的に類似している。カント学派が理性的人間像の立場で普遍的価値、客観的価値に重点を置き、個別的な経済的利害などを価値内容としなかったのは客観と主観の二値論理で判断しているからと考えられる。牧口も生活者（欲望的人間像）の立場から経済的利害を価値内容とし真理を価値内容としなかったのは、真理と価値の二値論理で判断したためと考えられる。

また、純客観的に真理を把握し、真理を非価値としたM・ウェーバーの没価値性もこの二値論理に基づいた真理観であり、論理的に牧口と類似しているとみなされる。牧口は価値から真理を追放し、ウェーバーは真理から価値を追放して価値と真理は全く別であることを二値論理に基づいて主張している。

両価値論を三値論理で位置付ける：二値論理では、有と無、主観と客観、真理と価値等相反する概念、現象だけで表現している。よって、二値論理に基づく価値判断はその二値の択一となり、そ

の価値論は概念的な価値哲学の枠にとどまり、真理と価値は概念的に分離されてしまう。

カント学派の価値論と牧口価値論の相違は、評価主体の境涯の違いによる価値評価の違いとして説明できるが、両価値論を総合的に位置付けることはできない。両論の位置付けを統一的に行うためには、二値論理・二次元を超える三値論理・三次元、すなわち、行為の次元や生命の次元・世界での論理に基づいて両価値論を考察する必要がある。

法華経では、生命を空諦（心）・仮諦（色）・中諦（生命）の三側面から説明しているので三値論理に基づいている。天台大師の法華玄義に説かれている空・仮・中の円融三諦と十界互具の法理を応用して真理（仮諦）、価値（空諦）の二値論理でなく生命（中諦）の視座から両価値論を位置付けることを試みる。十界互具とは、生命が地獄界より仏界にいたる十界のおのおのに十界を具足しているという法理である。例えば、人界が現れているその一瞬の生命にも、十界のすべてが「冥伏」している事実を示している。人間は親、兄弟等を人なみに思いやる平らかな生命状態の人界を基調とした生命傾向性をもつが、研究室等の縁によって真理探究者として声聞界の境涯に変転すると「人界所具の声聞界」と表現され、人界から声聞界に境涯が転換したことを意味する。この「十界互具」の原理に則れば、机等の縁に触れれば、人界から二乗界へ、また商売等別の縁に触れれば二乗界・学者から人界・生活者へと境涯の変換が可能になる。

信念や目的によって「行」を起こす世界・中諦の次元では、行為主体が目的を達成するためにある行動・手段を選択する時、認識作用だけでなく評価作用も働かせ価値判断し手段や行動を連続して選択するので、認識作用と評価作用は結合し、価値判断と認識もリンク（結合）することにも注意する。

牧口の主張する「生活から学問・価値論へ」は、人界（六道）から二乗界（学者）への評価主体の境涯の転換であり、学者の境涯で価値論を構築する作業過程であり、このような価値論にはカント学派の価値論が対応すると推論される。「学問・価値論から生活へ」の過程は二乗界から人界への境涯の転換であり行為が伴う過程であり、欲望をもつ人間が価値論を築くというより価値論を応用する過程であり、牧口価値論がこの応用的過程で有用な価値論に対応すると推論される。

このように、二乗界・学者から人界・生活者へ境涯が転換した場合は牧口価値論、またその逆に、人界から二乗界へ転換した場合は、カント学派の価値論が対応すると推論されるので、全体的人間観即ち円融三諦の生命観に基づく「十界互具という法理」を応用すると、両価値論は論理的に位置付けることが可能になる。

五　まとめ

牧口価値論とカント学派の価値論の価値内容の違いに注目して

比較考察した結果は、以下のようにまとめられる。

1. カント学派は、研究者（理性的人間）の立場で主として客観的価値を評価し追究したので「真理」を価値内容とし、「利害」を価値内容から除いたと推論される。

2. 牧口は、生活者（欲望的人間）の立場で主として主観的価値を評価し追究したので「利害」を価値内容とし、真理を価値内容から除いたと推論される。さらに、牧口は評価主体と価値内容を対応させ、美・利・善の価値判断の基準を明示し、彼の価値論を教育や幸福論に応用することも試みている。

3. 牧口が「真理」を価値内容に入れなかった理由は生活者（教員）の立場に立ち、実用主義思想の影響を受けて、教育的真理探究は学者に任せ、現場の教員にとって実用的でないと判断したためで、真理の価値を軽視したからではなかった。

4. 行為または生命の次元での仏法十界互具の法理に基づくと、一人の人間が縁・条件により研究者・声聞界の境涯から生活者・餓鬼界など六道の境涯に変化するし、また逆に別の縁・条件により生活者から研究者への境涯に変化することが可能であり、日常的にも経験するところである。この法理によれば、カント価値論は理性的境涯・研究者が評価主体である場合の客観的価値として位置付けられ、牧口価値論は欲望的境涯・生活者が評価主体である場合の主観的価値論として統一的に位置付けられる。

5. 主に二値論理に基づく西洋哲学的潮流の中で認識主体を立て客観的価値を追究してきたカント学派の価値論と、生の哲学の潮流の中で評価主体を立て主観的価値を追究してきた牧口価値論とが、仏法の生命次元で十界互具の法理に基づく三値論理で統一的に位置付けられたことは、従来までの二大価値研究の潮流も価値の両側面の研究として統一される可能性を示したものと考えられる。

参考文献

(1) 中村元『比較思想の軌跡』東京書籍、一九九三年、四九九～五〇〇頁。

(2) 牧口常三郎『価値論』（一九三一年、冨山房）、第三文明社、一九七九年。

(3) 渋谷 久『カント哲学の人間的研究』西田書店、一九九四年。

(4) W・ヴィンデルバント『哲学とは何か』河東絹訳、岩波書店、一九三〇年。

(5) 「価値の転換―ニーチェ」原 佑、所収『価値』、粟田・上山編、岩波書店、一九六九年。

(6) 牧口常三郎『人生地理学』（上、下）（『牧口常三郎全集第一、二巻』）、第三文明社、一九八三年（初版本一九〇三年）。

(7) 牧口常三郎『創価教育学体系』（全四巻）（『牧口常三郎全集第五、六巻』）、第三文明社、一九八二年（初版本一九三〇年）。

(8) 宮田幸一『牧口常三郎はカントを超えたか』第三文明社、一九九七年。

(9) 村尾行一『牧口常三郎の「価値論」を読む』潮出版社、一九九

八年。

（しぶや・せんきち、対話的観測論、人間自然学研究所教授）